【埼玉】365日無休で診療する小児科「早期治療で重症化防ぎたい」-若林大樹・医療法人社団Sunny理事長に聞く◆Vol.1

埼玉と東京で5年間に4つのクリニックを開院

2025年2月28日 (金)配信 m3.com地域版

埼玉県と東京都で4つの小児科クリニックを運営し、いずれも365日にわたって診療、病児保育室も備えるユニークな法人がある。医療法人社団Sunny（埼玉県川口市）の若林大樹理事長は勤務医時代、土日祝日に病状が悪化してしまう子どもを診るにつれ、年中無休でのクリニック運営を志すようになった。「若くして開業する分、地域貢献を自分の使命としたい」。そう話す若林氏に、開業の経緯と無休での診療を継続する思いを聞いた。（2025年1月24日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら
▼第3回はこちら

若林大樹氏（法人ホームページから引用）

在籍する職員数は約140人、常勤医10人で診療

――医療法人社団Sunnyは埼玉県川口市に2院、さいたま市に1院、東京都府中市に1院の計4つの小児科クリニックを運営しています。まずは、法人の成り立ちと患者数、職員数を教えてください。

2020年オープンのSunnyキッズクリニック戸塚安行院を皮切りに、2023年に川口駅前院、2024年6月に武蔵浦和院、2025年1月6日に府中院を開設しました。1日の外来患者数は本院の戸塚安行院が最も多く、インフルエンザのピークを過ぎた現在は平日に140～170人ほど、土日祝日に160～200人前後です。川口駅前院は平日に約100～130人、土日祝日に約120～150人、武蔵浦和院は平日に約80～100人、土日祝日に約100～150人です。

職員数は常勤が60～70人ほどで、非常勤を含めると約140人に上ります。当法人は2023年から短期間で3つのクリニックを開設したため、この間に一気に職員が増えました。常勤医は10人で、2025年4月に3人増える予定であり、週に1～3回診療している定期非常勤医は7、8人です。これらで診察枠の7、8割は埋まっており、残りの枠は月に1～3回ほど勤務してくださるスポット勤務の医師が対応しています。なるべく初出勤の医師が診療する機会を減らすように法人内で調整しています。

――若林先生は東京都出身です。なぜ、埼玉県川口市で開業したのですか。

出身である東京に近い首都圏で開業したいと考えていました。「小児科クリニック」をイメージしたとき、駅から近く、家族が車で通いやすいよう大きな駐車場があるところを探しましたが都内では見つからず、縁あって本院の物件を紹介してもらいました。

本院は埼玉高速鉄道「戸塚安行」駅から徒歩3分とアクセスが良く、戸建てであり、しかも駅周辺に小児科はありませんでした。決め手となったのは、内覧した日に目にした光景です。周辺を歩いていると、近くに大きな公園があり、多くの家族連れでにぎわっていました。子どもが元気に遊んでいて、近くのファーストフード店にも多くの親子がいました。「明るい雰囲気でいいな」と感じ、開業のイメージが膨らんでいきました。

Sunnyキッズクリニック戸塚安行院の待合室（法人ホームページから引用）

勤務医時代「もっと早く小児科医が対応していれば……」

――全てのクリニックが年中無休、365日にわたって診療していることが法人の特徴です。開業当初から継続しているそうですね。

そうですね。無休で診療することは開業前から決めていました。背景は勤務医時代の経験にあります。私は過去、栃木県や群馬県など地方の病院に勤めることが多かったのですが、当時は土日祝日に診療している医療機関が周辺にありませんでした。休診日には他科の医師が当番で子どもを診ている状況で、重症化した子が月曜日に病院に紹介されるケースが多くありました。尿路感染症が悪化してショック状態になっていたり、川崎病に合併して冠動脈瘤ができてしまっていたり。「小児科医が土日にしっかり診ていれば防げたかもしれない……」と悔やまれることが少なくなかったのです。

――過去の記事によると、開業当初はクリニックに在籍する医師が若林先生一人で、ご自身も3、4カ月は無休で働いていたといいます。当時はハードな生活だったのではないでしょうか。

開院したのが2020年12月で、翌年の4月に後輩の医師の入職が決まっていました。そのため「まずはそこまで走り切ろう」と。無謀にも思える私のチャレンジに乗ってくれた後輩医師やオープニングスタッフには感謝しかありません。それと、診療に加えてハードだったのは院内処方を4、5カ月ほど続けたことです。

門前薬局が365日診療というクリニックの方針を想定しておらず、日曜と祝日は休みでした。それで、これらの日は院内処方に切り替えたわけですが、私もスタッフも薬の細かな管理は初めてであり、これは大変でした。薬局の営業日が終わるとクリニックに多くの薬が運ばれてきて、日曜祝日は私も看護師と一緒に処方内容と薬の種類・個数が合っているかを確認しつつ患者さんに渡しました。余った薬は薬局の営業が再開する月曜に返しますが、このときも薬の数が合っているかを確認する必要があります。慣れない作業でミスをなくしていくのは容易ではありませんでしたが、「地域のためだから頑張ろう」とスタッフ皆で一致団結しながらやっていたのも今では笑い話の一つです。

患者増で門前薬局に相談、毎日営業してくれるように

――クリニックのブログによると、今は門前薬局もクリニックと同様、365日営業しているとあります。

薬局が営業日を増やしてくれたんです。開院してから土日祝日の診療を継続することで、これらの日に来る患者さんが増えていきました。それで思い切って相談してみたところ、私たちの取り組みを評価してくださって。「これほどの人数を診てくださるのであれば、私たちも薬剤師を整えるので毎日やりましょう」と言ってくれたのは本当にうれしかったですね。開業医として経験がまだ浅い当時、「諦めずに続けていればスタッフ以外にも協力してくれる仲間ができるんだ」という、貴重な実感を得られました。

この薬局は個人が経営されていますが、オーナーとスタッフの頑張りによって今は日曜祝日だけでなく、ゴールデンウィークや年末年始も含めて年中無休で営業してくれています。

――院内処方や薬局との交渉などのお話から、365日診療を継続していく信念を感じました。

「若くして医局を辞めさせていただく分、地域貢献を自分の使命としたい」――。開業前からそう考えていました。私が開業したのは33歳のころで、体力も十分にあります。そうであれば、平日に診療して土日に休むといった一般的なクリニックではなく、チャレンジしながら地域貢献を果たしていきたいなと。「365日診療」というコンセプトをまず決めて、それにふさわしい形をつくっていきました。

◆若林 大樹（わかばやし・だいき）氏

2012年慶應義塾大学医学部卒。横浜市立市民病院での研修後、済生会宇都宮病院やSUBARU健康保険組合太田記念病院などに勤務。2020年にSunnyキッズクリニック戸塚安行院を開院。2025年1月までに埼玉県と東京都で4つの小児科クリニックを運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索